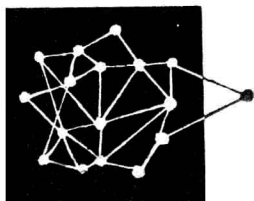




誕生石

小山いと子



朝日新聞社

石 生 誕

昭和二十九年五月十五日一版発行

定価二四〇円

著 者 小 山 い と 子

発 行 者 杉 山 胤 太 郎

印 刷 者 長 久 保 慶 一

発 行 所 朝 日 新 聞 社
東京都丸ノ内
大坂市中之島
小倉市砂津

目 次

橋	「嵐といふらむ」	山の呼び声	べに文字	富士は晴れたが	子供が漏る	ダイヤと瑪瑙
---	----------	-------	------	---------	-------	--------

117	89	67	43	27	17	3
-----	----	----	----	----	----	---

「誕生石」のおぼえ書	スター・ルビー	対決	黒い自動車	殺意によって	十時と十一時
------------	---------	----	-------	--------	--------

装幀・恩地孝四郎
 挿画・山内豊喜

223	215	189	175	163	151
-----	-----	-----	-----	-----	-----

誕
生
石

小山
いと子

ダイヤと瑪瑙

ダイヤと瑪瑙

白い大きな鳥のつばさが、ぎーッとしぐれのような音を立てたと思つたら、朝になっていた。尚子はソファの上で、身じろぎをした。いつもすべすべと快く感じられる自分の肌が、何となくうつとうしかったのだ。ああ、そうだった、と思つた。彼女は四十を過ぎて却って健康になつたようだ。女だけのひそやかな打明け話では、友だちはそれぞれ多少なりと生理の変調を見ているが、尚子はこの二、三年、二日と狂つたことがない。

板壁一重の店の間で人声がしている。ひとりとは良人の宗吉の声だ。ひとりとは若い外の声だ。娘の順子かも知れない。起きようかなと思つた。疲れはすっかりなおっていたが、まだ寝足りなかつた。

あくびをしながらふと気がつく、ビリヤード・グリーンのワンピースを着たままだつた。昨夜寝たのは二時半だつた。大森にダイヤの出物があるというので明るいうちに出かけたのだ

が、いざ手放すとなると持主の元男爵夫人のはらが容易にきまらない。結局現金を見せ、即金支払いの手でやつと買取ったか、気骨の折れることだった。帰って来て、紅茶にウィスキーを入れて飲んだら一時に疲れが出て、そのままソファに横になってしまったらしい。毛布をかけてくれたのはたぶん宗吉であろう。それでも指環だけはちゃんと金庫へ入れて、鍵をかけて、その鍵をまくら代りのクッションの傍へおいていた。

薄目のまま、肉づきのよい腕を投げ出して鍵をさぐっていた尙子は、おや、と手を止めた。「誕生石」といつているのが聞えたからである。順子の声ではない。

「私の誕生石が欲しいの。いいのある？」
といつている。

「ありますよ、どうぞおかけ下さい」

女の子は客たろうか？　こんなに朝早く来る客はめったに買わないものだ。

「小父さんしはらくね。いつ帰って来て？」

「昨日です」

「今度は長くいゐるの？」

「いいえ、今朝またすぐ行くんですよ」

「そう、あつちは紅葉かきれいでしょうね」

「いえ、まだ早いです。——ええと、サイズはこれでしたね」

なあんだ、あの子か、と尙子は思った。夏のはじめごろ、二百三十円のイヤリングを買いに

来て、米穀通帳と書留の印のあるたどたどしい女文字の空封筒を忘れていった。だから家中のものは彼女の本籍から生年月日まで知っている。届けにいったら、壁の落ちた駅うらのアパートにひとりで住んでいた。以来彼女はよく立ち寄るようになった。一度丈高い兵隊と安ものの指環を買っていったことがあった。

「あら小父さん、そんな新石いやよ」

「え？ 天然石の方ですか？ 高くなりますよ」

「いいのよう、ねえ、パパ。——小父さん早くしてよ、いそぐのよ。これから東京駅へいくの。ツバメに乗るのよ」

甘い、誇らしげな口調である。連れがあるのか！

尚子は思わず顔をあげた。女が欲しがり、男が買う、——これは東西古今、宝石の通則である。

二

だみた男の声がいつている。

「何もお前、こんなちっばけな場末の店であわてて買うこたアないじゃないか」

「だって、パパ氣がかわるんだもの、お金のはいったときすぐでなくちゃ」

「もっと大きな店がいいぜ」

「あら、ここ、案外いいものがあるのよ。それに正直なのよ。パパそんなこといってまた惜し

くなつたのね」

「いいや。ではすぐ買いなさい。誕生石、誕生石っていったい何やね、そいつは——」

「生れた月によりまして宝石がきまつてゐるのでございます。その指環を持つておりますと幸運が来るといわれていますので……。こちらさまはたしか八月でしたね。紅縞瑪瑙ベニシマノウ。これでございます」

「ほう、きれいなものだな、なんぼくらいするんやね」

「はい、四千二百円でございます」

「たつた？——ちがうわよ、小父さん」

「はあ？」

「そうじゃないわ」

「いえ、八月はたしか瑪瑙でございますよ」

「ちがうつていうのに」

「ではちよつとお待ち下さい、しらべてみます、——ホラ、やっぱりそうです、まちがいございません」

「どれ、うん、なるほど、そのとおりだよ、お前」

「いやアよ、パパ。小父さん思いちがひしてるのよ。私八月じゃないわ、四月生れたのよ」

「四月？ それなら、と、——ダイヤモンドか？」

「そうなの。パパ」

「いいえ、たしかに八月でいらっしやいますよ」

「どうしてがんにそっくりなのは、小父さんは」

「せっかく誕生石をお買いになるのにまちがえたら、幸運が台なしですからね。私がおぼえて
いるわけは、うちの娘も八月だからですよ、一つ年上の八月なんです」

「だって自分のことをまちがえるはずがないじゃないのッ」

女の声は腹立たしげだった。

尚子のはね起きた。何という愚直な良人だろう！ 彼女のはらがわからないのか。カーテン
のすき間から、歩道に沿うて停っている真新しいライト・グリーンの自家用車が見えた。さつ
き夢の中で羽ばたきだと思つたのは、この車の停る音だったにちがいない。

尚子はあらあらしく髪をなでつけ、ワンピースのしわをひっぱりながら、いそいで店へ出て
行った。

八月生れの貧しい十九の小娘が、豪華な服装でショウ・ケースによりかかっていた。胸を大
きくあけた真紅のブラウス、黒のスカート、純白のダスター・コートは思わずさわつてみた
くなるようなしなやかな生地で、腕なりにピッタリ仕立てられた袖の先の方を小粋こ粋にたくしあげ
ているので、何ともいえないしゃれたかたちにながふくらんでいる。

三

傍に立っているのは、でっぷりと脂ぎった、お定りのブローカー風の六十近い男であった。

女好きのくせに、糖尿病か何かで普通では女を抱けない、だから子供のような若い女の歎心を買い、いやらしい方法で満足しようとする。この種のお金持が宝石屋の一番のつけ目なのだ。尚子はそれとすばやく見てとった。と同時に顔には自然に愛嬌があふれ出た。

「あら、いらっしゃいますし。おはようございます。毎度ありがとうございます。これから御旅行ですか。まあいいですわねえ。熱海でございますか。それとも箱根あたり？——さあどうぞ、旦那さま、おかけくださいまし。今日はいいいあんばいに長雨があがりまして、ほんとにお楽しみでございますわね」

こんな場合、男に愛嬌をふりまくか、より多く女のごきげんをとりむすぶのがよいかは、双方の年齢と性質と持ち金の如何が決定する。この男は女に甘く相当のお金持だろうと尚子にはらんだ。小娘は開いた胸にアメリカ風の、キャタビラのように不器用に厚ぼったい金の飾りをつけている。老人に買ってもらったにちがいない。尚子はいつもの友達言葉を改めた。

「まあお見事なネックレスでございますこと。指環はそれに調和するものでなくてはいけませんわ」

「私、誕生石を欲しいのよ。それなのに……」

「いえ、私よく存じあげておりますわ。四月でいらっしゃいましたね。いいのがたくさんまいっております」

「そうお、見せてちょうだいな。ホワイト・ジルコンはいやよ。上等の天然石のダイヤにするの」

小娘は真紅に塗り立てたくちびるをひらいて満足そうに笑った。わが意を得たり、というのはこういう顔だろうと尙子は思った。

「それはもう、こちらさまでしたらほんものでございませんとねえ。——これはいかがでございましょう？　銀座あたりでは三万五千はいたします」

二万八千円と正札のついたのを、尙子は二人の間においた。

「もつと上等なの？　今一キャラットどのくらいしてるの？」

「三十六万円ほどでございます」

そういうながら尙子は、不平そうな小娘と、さして表情を変えない男の様子を見くらべた。とつさに、好機逸すべからずと思った。

「実は取っておきのダイヤがございますのよ。少々お待ち下さいまし」

尙子は洋間の金庫から昨夜入手した指環を出し、正札入れの小箱をかきまわして手早く「金貳拾壹万円也」という票をつけた。

「これでございますが、ちよいとはめてごらんなさいまし。——あら、ぴったりですわね。とてもよくお似合いですわ。お見事なネックレスにまるであつらえたようにうつりますわ。ちよいとごらんなさいまし、ほら」

ズイと台つきの三面鏡を向けると、小娘は紅く染めた長い爪の指をうつしてながめていたが、鼻にかかった甘い声で老人を見上げた。

「パパア、これにするわ。いいわね、買ってね、パパ」

男は肉のつきすぎた丸まっちい自分の手のひらに、わざわざ女の手を乗せて握りながら、指環よりも正札の方を見た。

「ちいっと高いようだな。もすこし手ごろなやつはないかね」

「なにさ、パパ、あんなにお金はいったくせに、ケチンボね」

男は年に似合わず照れた。

「そうポンポンいうなよ。仕様がな、では買いなさい」

女はいきなり飛びあがり、両手をまわして男の首にかじりついた。映画のまねらしいこんな格好が、へんにイタについていた。

「うれじい！　パパ、パパ大好きよ。ありがとう、大事にするわ」

男はゆっくり首を動かして女の突撃を避けるでもなく避けぬでもなく、ニヤニヤしながら、カバンの中からベルトをかけた二束の紙幣と若干をかぞえ、ショウ・ケースの上においた。

「ありがとうございます。こういうものはいいのほどお得でございますよ。いつでも換金できますし、税はかかりませんし、インフレには大丈夫でございますし、——お包みいたし、あ、さようでございますか、おつけになつてらっしゃいますか。とってもお立派でございますわ、見とれてしまいますわ」

尚子は精いっぱいのお世辞を浴びせながら、歩道のはずれまで送って出た。ひろびろとどこ

までも平らかな路面にはまだうすく朝靄が立ち迷っている。ライト・グリーンの車はすぐその中に消え去った。

甲州街道は戦後いちはやく舗装整備された道路の一つである。歩道の舗石は今だにはがれ欠けているが、鏡のような車道は、京王電車を平行させつつ、新宿からこの付近までほとんど一直線に快適なドライブ・ウェイを形づくり、それから幅をせばめて遠く甲州に走っている。

尚子たちがこの代田橋に住みつくようになったのは、ほんの偶然といってよかった。良人の江戸宗吉は土木技術者で、二十の年から真面目につとめ、終戦のころは東京に近いある県の課長級までいったが、間もなくクビになった。彼が甲種工業学校しか出ていなかったこと、下の受けはよかったが、上役に重宝がられなかったことなどが原因であった。そういう土木技術者は五十になると、体力、頭脳が衰えなくても「後進に道を開くために」無理にやめさせられる。それは口実でもあるが、現実でもあった。国は小さく人多く、貧しい日本では、そういうむだをしなければ若者の席がないのである。やめたことにより体も頭も急に弱りこんだ幾十万の壮年は、子供に養ってもらう幸運な例外をのぞき、人夫として道路や河べりでモッコをかつぐか、陋巷ろうきやうに窮死することになる。これは東京駅うらの会館に代表される鉄道関係のように「賢明な」組織を持たぬ大多数の土木技術者の、宿命のようなものかも知れない。

十五万の退職金はまたたく間に米塩の資についえ、一家三人はその時、郷里へでも帰ろうと、甲州街道を歩いていた。残りは三百円になっていた。焼け残った両側のあちこちに、少しばかりの着物や洋服や卵やあずきを並べた交換所があった。代田橋まで来たとき、夫妻は急に相談